

## 『わが主の生涯』における ディケンズのキリスト教世界観

阿久根 政子

### Dickens's Christian Worldview in *The Life of Our Lord*

AKUNE Masako

Dickens described himself as a New Testament Christian. In his retelling of the Gospel for his children, he stressed his moral teachings and parables in the New Testament.

Nowhere in his novels does Dickens articulate a personal credo; for that, we must look to the book he wrote exclusively for his own children's Christian education, *The Life of Our Lord* (1864), but *The Life of Our Lord* was never published in Dickens's lifetime, as intensely personal and private was the book's message of charity.

In *The Life of Our Lord*, although he refers consistently to Jesus as "Our Saviour", Dickens seems almost Unitarian in his conception of Christ as a teacher, healer, ethical leader, a New Testament Christ who preaches forgiveness and forbearance. And he emphasized Christ the man (despite resurrection scenes in Chapter 11) rather than Christ the Son of God. However, Dickens dwells on the miracles, probably because he deemed those narrative interest to a child audience.

In this thesis, I would like to examine Dickens's Christian thoughts, Christian worldview, the basic character of Jesus and the person of Jesus in *The Life of Our Lord*.

Key words: Christian thoughts,

Christian worldview, the basic character of Jesus, the person of Jesus

キーワード：キリスト教思想、キリスト教世界観、イエスの基本的性格、イエスの人物

#### はじめに 『わが主の生涯』の出版の経緯

*The Life of Our Lord* (TLOL) 『わが主の生涯』は英国の小説家 Charles Dickens によって書かれたイエス・キリストの生涯についての本である。1844年から1848年の間に、彼は *David Copperfield* を書いていた時、この「TLOL」の本は息子どもたちのためにディケンズのキリスト教信仰を教え込む目的で書かれた。しかし、この本が出版されたのは彼の死後 44 年の 1904 年であり、88 年もの間出版されずに草稿のまま保存されている。

キリスト教で書かれたディケンズはらるるばら息子どもたちのためにこの「TLOL」を書いたと言われている。ディケンズは息子の生中、この本を複製することを固く禁じ、息子の義理の妹 Georgina Hogarth に「ディケンズの私教にこの原稿を手渡すことも、それをコピーすることも、また誰からも持ち出すことも、決してしてはならない」と述べている。

彼の手書きの原稿は、1878年ディケンズの

死後、George Hogarth に買われた。1837年書女が亡くなり、その原稿はディケンズの息子 Henry Fielding Dickens の所有となった。作者ディケンズの授意によって、ディケンズの死後の息子が亡くなるまで出版は延期されていた。

1838年、息子の Henry Fielding Dickens が亡くなった後、Sir Henry の本主人と彼の子どものたちは、この本を出版することを決めた。その後、別版題を取替した *The Daily Mail* によってこの本が出版された。

この本は「子どもたちよ」というディケンズの手紙向けの言葉で始まっている。

*My Dear Children, I am very anxious that you should know something about the History of Jesus Christ. For everybody ought to know about Him. No one ever lived who was so good, so kind, so gentle, and so sorry for all people who did wrong, or were in any way ill or miserable, as He was.*<sup>11</sup>

時勢、もよもよとしたディケンズのユーモアな筆致のある御ちやうどないイエスの生涯とその教えの物語である。例えば、軍卒軍の中でマリアとマリアが往復意識のために、ナザレのガリラヤの町からエジプトのペトレームへの旅の様子を説明を添えて、旅路を添えて多くの人々と一緒に旅をしたこと、道難の状況がとも思わなかったこと、旅をすることは非常に困難であったこと等、子どもたちに当時の社会情勢を添えている。また、使者ヨハネの箇所ではイザヤやタデヤについても説明を付け加え、文脈らしい愛を見せている。

*You never saw a Infant, because they belong to that country near Jerusalem, which is a great way off. So do camels, but I think you never seen a camel? At all events they are brought over here, sometimes; and if you would*

*like to see one, I will show you one.*<sup>12</sup>

とここで改めてディケンズはこのよ様なコメントを書き入れているが、彼はイエスが行った奇跡とキリスト教徒が持つべき愛徳、あやめぬ、同情についての教えを重点的に取り扱っている。この『1101』の作品はディケンズの文学的な効果を認むすべからず作品のひとつではないからしめないが、彼のもっとも優れない作品のひとつであり、ディケンズのすべての作品の背後にある精神的、宗教的な要であるといえるものである。

本研究は主に『1101』の文中に表されたディケンズのキリスト教思想、キリスト教思想源流、イエスの基本的特徴、イエスの人柄、イエス教について考察する。

## 1. ユニテリアン教会とディケンズの関係

19世紀は宗教的、神学的危機と文化の時代であった。特にディケンズの時代において、どれを道徳かという宗教的、神学的見解はいくらでもあった。よりオーソドックスな宗派の間で、*the Establishment* (長老派教会) は *the High Church* (高教会)、*the Low Church* (低教会)、*the Broad Church* (広教会) 等の細かい区別を認めていた。しかし、ユニテリアン主義は上述の宗教思想から外れていた。ディケンズの宗派の論議は長老派教会内に属し、彼のユニテリアン主義への一時的な関心はオーソドックスから離れ進んでいた。特に長い時間であったように思われる。

1843年3月2日付けて、ディケンズがアメリカにいる *Comedian Felton* に送った手紙に次のように書いている。

「我々ユニテリアン教会のメンバーは彼と宗派も人間性への日常の協力にうんざりして、私自身の自分の考えを実行に移し、ユニテリアンの福音に加わった。彼らにはできる限りを人間の向上のために何かをしている。彼らは慈悲と寛容さを実践している。」<sup>13</sup>

ディケンズの賞賛者であったアメリカのユ

ユニテリアンである William Channing と出会って、アメリカから 1842 年に帰ってすぐ、ディケンズは Unitarian Chapel に所属し始めた。後にチャニングを記念して、メソヂヤン礼拝堂での Edward Taggart の説教を聞くまでに、彼は Taggart が牧師であった The Little Portland Chapel に通い始めた。同年 11 月 20 日このメソヂヤン礼拝堂の朝、ディケンズは Taggart と説教についてのいくつかの共通の考えを分かち合った。この時からディケンズはユニテリアン主義とながり、Taggart との親交の道筋が明かされた。

ユニテリアン主義にディケンズを惹きつけた主な理由は、Taggart とユニテリアン説教人々の人道主義の関心と、人間性の道、父である神、すべての人間を行為と経験の教え等、彼が以前から強く感じていたアイデアについてのユニテリアンの強調を認めたことである。しかし、ユニテリアン説教者たちに加わることに際してディケンズは道徳や宗教的伝統の回復を受け入れたというより、むしろ「彼の考えや意見を自から含め、実践的な宗教についての関心事を再燃するグループを組織したこと」<sup>1)</sup> はもっともらしいことである。

彼の生涯において、ディケンズは門外者として扱われていた拡大を宗教的可能性の見地から、ユニテリアン主義への彼の批判は総合的に考えると、キリスト教信者の集まりの教会内部に対する批判であったように思われる。

したがって、ディケンズの素朴な宗教に関する考えは、彼が *The Life of Our Lord* を構成していた時に完成していた。印刷についてのディケンズの考えはダイナミックな方法で、彼の生涯で発展し続けたが、彼の素朴なキリスト教の理解と信仰生活は実質上変わることはなかった。

ディケンズの作品、特に『我が主の生涯』(TLOL) の作品はユニテリアンの影響は及ばされていない。なぜなら、ディケンズが福音に関する証人として信心深くあるばかりでなく、最も重要なのは、本物のキリスト教徒の

信頼と信頼生活の生き方を子どもたちにも与えるイエスの non-sectarian (無宗派) をこの作品の中で表そうと積極に試みていることであり、イエスの Unitarian 目的を書くことを望んでいないからである。

以上の事から、実証子、Henry Fielding, Dickens は父ディケンズ非であることを、深い宗教的関心を持った人として書き、Robert Browning 等 1848 年刊行時に Unitarian Christianity に興味を示したディケンズのことを、ユニテリアンに傾倒している人として述べている。Gary Colledge によると、ディケンズは一晩半前後のアンブライムン立憲から就いて進めることはなかったとはっきりと意見を述べている。

## II. キリスト教思想の機軸としての「TLOL」

1848 年次にディケンズの子どものための、ディケンズによって書かれた『我が主の生涯』*The Life of Our Lord* (TLOL) は 1934 年まで出版されていなかったが、ディケンズの作品を研究するうえで、この作品が重要な役目を果たしている。ディケンズの宗教と宗教的思考は、彼の作品の重要な構成要素として知られているが、それにも関わらず、『TLOL』の作品は無視され、注目されていない面が見られる。

Gary Colledge はこの作品をディケンズの宗教的信仰とキリスト教理解のまじりめで道徳的な演説であり、またディケンズが書いたユニークなジャンルとして見てきた主張している。

『TLOL』の中の神学的専門用語や宗教的表現は限として、この本がキリスト教の本質の表現だけでなく、ディケンズのキリスト教思想の発展で道徳的な演説であることは明らかである。このことについて、Gary Colledge は次の3つの理由を挙げている。<sup>2)</sup>

まず第一に、この作品は、教の子どもたちの道徳と宗教的な教育の目的で、教の子どもたちのために、特別に文脈によって書かれたということはディケンズの意図と意図を示し

ている。彼は自分の子どもたちの宗教教育にかなり関心しており、この作品は彼の宗教教育の手段をなす部分であり、ディケンズの配慮と注意を窺っていた。

第2章目に、この作品がイエスの生涯のプレゼンテーションと、キリスト教についてのディケンズの世界観と彼のキリスト教の理解を窺い上げ、この作品の理想と賛成において表れつつ複雑な意向があることを示している。福音書の中のイエスの生涯とその教えはディケンズの宗教的価値と世界観の典型的な要素である。

最後に、この作品が簡潔な構成と簡潔な技巧の物語を持っていることは、ディケンズが「real Christianity」であると信じている本質を自分の子どもたちに伝えるためにイエスの物語的史実の創作に必要がなかったことを示している。

要するに、この「TLOL」が簡潔な構成と簡潔な技巧によって書かれていることは、ディケンズが彼の子どもたちに「本質のキリスト教」の本質について伝えるために、イエスの物語的史実を創作することに専念していたことを示している。

### Ⅲ. 「TLOL」におけるイエスの基本的特徴

ディケンズによるイエスの生涯についての「TLOL」は彼の子どもたちがキリスト教とキリスト教徒であることの意味を理解することが出来るようになるために書かれたものである。彼はもっぴらイエスの人格を通して、イエスがキリスト教徒の特徴と彼の価値であることを子どもたちに伝えたいかった。それ故、「イエスの基本的特徴」の中の描写は「TLOL」の執筆におけるディケンズの目的の中核をなすものであった。そして、ディケンズはイエスについて「TLOL」の第1章のはじめから判断に示している。

No one ever lived, who was so good, so kind, so gentle, and so sorry for all people

who did wrong, or were in anyway ill or miserable, as he was. (1990:1)

「誰もを愛したすべての人々、あるいは病弱や不幸のうらみのあるすべての人々に對して、彼の通りに、そのように寛大で、親切で、やさしく、苦しみを受けて私身と人皆が一つとして一人としていなかった。」

「TLOL」の中でイエスについての基本的特徴的描写は、イエスが明らかに出した言葉あるいは行動であり、イエスの基本的な特徴を説明である。ディケンズはこの作品の中でイエスの基本的特徴について説明している。

まず第1にイエスは「寛大で、慈悲深い」(kind) ことであり、善い行いをしたことは、イエスの最も目立つた特徴である。そのひとつの例として、「イエスの親切・慈悲深さ (goodness) に影響しているアマザイアの少年の家での 聖歌い会」の話 (1990:38, 48) がある。イエスが「goodness」であるために宗教指導者たちに恐れられ、離れられていた。それにもかかわらず、イエスは「善いこと」を行って助け、人々はこれの「善い行い」をやるイエスについていった。

ディケンズがイエスの基本的中核をなすもの、また教の子どもたちに最も理解し、受け入れてもらいたかった中核をなすものは、明らかにこの「goodness (親切)」であった。ディケンズは「TLOL」の締めくくりに言葉として次のように書いている。

Remember! — It is Christianity to do good always — even to those who do evil to us. (1990:10)

「覚えておきなさい! いつも善を行うこと、親切であること—私たちに對して悪事を行う人々にも、いつも親切でありなさい。このように行うことがキリスト教徒です。」

「TLOL」に書かれているイエスの基本的特徴の2番目の特徴は、彼の「あわれみ・同情 (compassion)」である。ディケンズは教の子どもたちに優しい人々が必要としているもの

に気配るように熱心に勧める時、彼はイエス・キリストがどのようにして新しい人々の中に入り、どのようにして新しい人々の復活をしたか、子どもたちに考えさせた。

この本の第3章で奇蹟の面が多く出てくるが、そこでイエスはいつも病人に対して憐れみ深く、同情に満ちていた。シモンの家である厚顔い金（ヨハネ 7:17,47）はキリストの良朋（Goodness）とあわれみに満ちた同情（compassion）に全く同調していた。また、イエスはバツサイダの娘（ヨハネ 5:1—10）でその病に同情を示し、彼を癒した。ラザロの死（ヨハネ 11:1—10）に際し、マリアとマルタを面会した時、「イエスは彼らの悲しみ（sorrow）のためにあわれみでいっぱいになり、イエスも泣いた。

これらの創言において罪も意味あることは、聖書のこれらの話の中には、イエスの同情とあわれみという性質が強調されていないことである。この「TL01」においてこれらのエピソードの中の罪や病気の治癒の状態に対するイエスの憐れみ深い対応は、ディケンズの福音書の中にある話を読んだ時、これはイエスの特徴であることに、ディケンズ自身が気づいたことである。

—he was always merciful and tender. And because he did such good, and taught people how to love God and how to hope to go to Heaven after death, he was called Our Saviour. (TL01)

「TL01」におけるイエスの第3章目の特徴は、イエスが「しもべ（servant）」なれる者であったことである。イエスは癒えず癒えの事を考え、彼らが必要とすることに気配っていた。イエスの教訓は曲線への優しいやり、奉仕（service）の物語であり、イエスの純潔、面白い人々だけに知られていない。ディケンズは「TL01」の中で、「No one ever loved all people as well and so truly,」 as He did」とイエスはすべての人が満足しようと思われたと感想を述べている。

ヨハネ 13章 3—17節にある「洗足の話」は、イエスの弟子たちがお互いに洗え合って、イエスに従っていくための教訓を示されたもので、しもべ・奉仕者（servant）の身分という概念が文脈の中でディケンズによって強調されている。ペトロが罰金だイエスの洗足の行為について、ディケンズは子どもたちに次のように説明している。

He did this, in order that they, remembering it, might be always kind and gentle to one another, and might know no pride or quarrel among themselves. (TL01)

「TL01」の中にあるイエスの特徴の第4章目の重要な側面は、「許しの手本（the model of forgiveness）」であったということである。私たちは、イエスが福音の中で許すことを教えたり、許すことを勧めておられることに気づく。例えば、イエスはカインの家で罪深い女に対して許すことを勧めている。想った罪状にイエスの面前に連れてこられた手首の行為をしたその女に対して、イエスは許しを与えた。また、イエスは悪魔をやり方でイエスを擁護した武士たちを許して下さるようにと十字架の処刑の前には神に懇願した。ディケンズは許しの大切さを教えるために、この二つの物語を入れた。この二つの出来事に関して、ディケンズは彼の子どもたちに許しの精神の必要性を教える福音書の別の側面、悪魔の誘惑の言葉を使った。この許しの精神は、子どもたちが復讐行動するようにディケンズが望んだ「おが主イエス・キリストの生涯と教訓」の重大な部分であるように知られる。

多くの人々を癒した第3章目のイエスの特徴は、「TL01」の中でそのイエスの音楽教師とその福音の最も目立つ側面のひとつである「完全な教師（the consummate teacher）」としてのディケンズのイエスの描写である。

ディケンズは、イエスが教えることは、イエスの福音のなくてはならないものだと述べている。「イエスが最も良きより良い人間になるように教えたこと、またイエスが、彼ら

にいかにして神を愛し、そのようにして死後天国に行くことを望むか」ということを書いたこと」をこの作品から学ぶことが出来る。

要するに、ディケンズはイエスの教義に示されている「愛憎 (goodness)」「あわれみ (compassion)」「謙遜さ (humility)」「許し (forgiveness)」「奉仕 (service)」というキリスト教の教義を含む倫理的な教訓としてイエスの教えを示している。このようにディケンズはイエスを福音に描かれた文脈を人物として置き、権威としてイエスの基本的な教義を他の子どもたちに示した。このようにディケンズは人間イエスを教訓したようにも感じられる。

## IV. チャールズ・ディケンズのイエス

アン・ドリモンとユニテリアンが共に用いた共通の説明的な神学の専門用語はいまや表面を失った。ディケンズのキリスト教世界観を理解するのに困難をもたらすものである。共有された専門用語の使用の結果として、ある程度あいまいな表現は許されるが、はっきりと述べられた彼の考えの発展は、専門用語に特別な明瞭さをもたらしている。とりわけ、「神の子」というタイトルの使用の発展、礼拝の目的としてのディケンズのイエスの描写、そして「神」という言葉の使用はキリスト論と「TLOL」の中のイエスの人徳の同一性を焦点を合わせている。このことについて、最も重要なことはディケンズのイエスについての描写はイエスの形式ばった神学的な解釈からではなく、むしろ福音書の文脈やその教訓の編纂の教団の中で表現されたディケンズ自身のイエスについての観念から出ている。ディケンズのアン・ドリモンに関する共通性についてのアースターの主張に照らして考えるとディケンズのイエスについての描写は、伝統的なものである。

「TLOL」の中にもユニテリアンに影響された注釈めかしがあるが、最終的に「イエスの人徳」についての重要な考えは、「福音書で伝統的なキリスト教のほとんど一時的な範囲内で広

く普及したアン・ドリモン主義という前観と福音によって、ディケンズのイエスの描写はもっとも深く適合されていることを明らかにしている。」<sup>17</sup>

キリスト論的に言えば、彼が「TLOL」に書いているように、ディケンズのイエスは、神の神聖なる子 (the divine Son of God) であり、三位一体の神の第二位のペルソナである。キリストは奇跡を行い、死者を生き返らせ、礼拝の対象であり、キリストの物語の頂点で、神を宣言する。このように、ディケンズは「TLOL」の本の中でイエスの人徳、あるいはイエスは誰であるかを示している。

しかしながら、この本を書いたディケンズの目的は、他の子どもたちに本来のキリスト論的教義の形質を伝えることではなかった。

イエスの人徳に関してのディケンズの意図は、特定の宗派やキリスト道の影響によって汚されていない福音書から出てきたキリスト教の教義を与えたキリストという人について、できるだけどの宗派にも属さない用語で子どもたちに示すことであった。

「TLOL」において、ディケンズは子どもたちが教団や神学から影響を受けずに、福音書の中にキリストの物語を見つけられるようにとイエスの生涯とイエスの教えを示した。このようにして彼は子どもたちに高キリスト教に習するよりどころを築くようとしたのである。次に *The Life of the Lord* の中に記されたディケンズのキリスト教世界観を探ってみよう。

## V. ディケンズのキリスト教世界観

ディケンズの宗教的思考の重要な表現としての「TLOL」は彼の作品の主要源を表現するための手がかりとしての役を演じている。またディケンズ自身の宗教学的信念と新しく設定した世界観のキリスト教的特徴の本質と福音書に関して、「TLOL」ははっきりとした意見を述べているある種の宣言であり、理論的準としての意を寓してしている。どちらかと言えば、キリスト教的世界観と相対する考え方が彼の

作品の中に見られる時、この「TLOL」は一致と統一を彼の小説の中に見る手段となるものである。イエスの物語としての *The Life of Our Lord* はディケンズのキリスト教的世界観を宣揚し、従来のイデオロギーの価値を覆っている。

*The Life of Our Lord* の中に含まれている世界観の概略は、一般的に異ならない、あるいはない。たまたま穿鑿したように見えるディケンズの作品の場面を説明をもたらすために、「TLOL」が個別的あるいは判別基準として用いることがあることを明らかに示すのに役立つ。自由な手段となるであろう。その世界観を究す基本的な要素を挙げる。

まず第一に、「TLOL」の中には「天の御父である神なるもの」が含まれている。その神は人々の生活の往來事を歴史的に見ておられ、正徳の道徳の世界を確立し、ご自身と神が創立した道徳の標準を正しく説明できるように人々を導かれる。

第二は、そのような正徳の道徳的世界において、人間は道徳的行動者である限り、「正しいことをなすべきこと」は、覆らに覆せられた道徳である。さらに、人間は死後、天国への扉を開くもたらすためだけでなく、善行が人生の終わりになされることも望む道徳である。

第三番目に、そのような道徳の世界において、人間は罪を犯す。また絶対悪人もあれば、習慣的に罪を犯す人いる。罪の罰や結果を犯めなければ、人は「神の道し」を定めなければならない。善きは明らかに善しを求むることを認め、神の精神的世界の中で正徳の恩恵を賜う人も受けている。

第四番目に、人間は神と神の道徳的な恩恵と別して責任があるので、人はどのようにして自分たちの道徳的責任を果たすのか、いかにして正しい行いを示すのかという手段をイエスの中に見出す。人はイエスの教義によって導かれることを求めるだけでなく、イエスの道徳と関係のある模範において、「イエスに似ること」がもっと重要である。

第五番目の要素は、特に関係のある例として、「イエスに似る」を伴うことである。イエスは人間の基本的な態度と取る舞いの基本である。

「TLOL」の中にあるイエスのぜひ逃げた罪悪な特徴のひとつは、神徳の必要に対する配慮と率性である。このようにキリストは、人間は善きに陥っていかんばかりのべきを求めた模範者である。人間は道徳で、高ぶらず、人に手を差し伸べる用意が用意されているべきである。すなわち、神への賞讃と道徳の本質のしは、人が神徳に対しての賞讃を求めた場合である。

「TLOL」の世界観の中にある第五番目の要素は「道徳と道徳的なもの」である。神の世界は、道徳的な出来事とその影響を受ける場所である。善しは成し遂げられ、悪徳は遠いおされ、死者はよみがえり、奇蹟が起る。更に重要なことに、十字架以上の死によって人間に救いをもたらすイエスは、神の道徳に捧げるために死からよみがえり、罪びとをために神に善しを求め、最後に、世界を救うために死んでこられるであろう。

「TLOL」の中に描かれたこのようなキリスト教世界観の中に、ディケンズの宗教思想の特徴が巧みに表現されている。それはまた、ディケンズの初期生活の観念を寓してあるものである。最も重要なのは、ディケンズが信じていたものの観念をはっきりと述べることを道徳とされていた「TLOL」がキリスト教世界観と信仰生活の中心であるとすれば、彼の他の作品の中に、ディケンズのキリスト教思想の表現のはっきりとした理解のための判別基準として、その観念を高く評価することが出来る。「TLOL」がいかに細く小説に光輝を添え、小説に明確さをもたらす。小説の中で表現されたキリスト教思想の中にある一貫性を明らかにするという点からみると「TLOL」はその神聖人のようなものであると言えよう。

## 第七巻に

ディケンズの唯一の宗教的な伝記的作品である『我が主の生涯』は海にも通ったように、ディケンズの自分の子どものために宗教的愛情を潤滑に書き改めたもので、1846年、「子どもたちのための新約聖書」(The Children's New Testament)という題で完成された。あくまでも自分の子どもたちだけに読ませるために書き改めた私物なものであったため、父ディケンズの意志も引き継いで、その複製を持っていた、星野の息子 Henry が亡くなった1934年、『我が主の生涯』(My Life of Our Lord)とタイトルを改めて、印刷された。

目次からなるこの作品には、イエスの生涯から厚みまでの生涯が詳しい言葉で語られており、初編キリスト教徒の福音についても簡潔に語られている。「我が主の生涯」を構成するにあたり、主にその福音書、それに付け加えてヨハネ福音書、マタイ福音書を材料とし、テーマに沿うように自由にアレンジし、聖書、聖書に就自筆の無い解説や論議が挿入されている。その中心となっているテーマは山上の聖訓であり、愛の行いが福音の結論の部分で強調されている。

この作品にははっきりとしたキリストの愛向と聖書の教義が書かれていないため、その精神と神聖が三位一体主義というより、三位一体を疑って唯一の神格を強調し、キリストの神格を否定するユニテリアン主義的と考えられるかもしれない。

ディケンズはキリストが「私たちの救い主」と呼ばれる理由を、「イエスがそのように愛の行いを行ったり、また神聖を愛するにほごうしたるよいか、死んでから天国に行くにほごうのようにしたるよいかということを人々に教えてくださった」からだと解説している。ある批評家は「これらの部分には、キリストによる神の愛という聖書の約束を拒否していないヴィクトリア朝時代の人の声」<sup>1)</sup>であると批判し、ディケンズの態度はキリストを真の生ではなく、たんなる教師として見てい

る者の態度であると言われたが、しかしディケンズは子どもたちにとって優しい教師を描け、キリストによる神の愛の行いについて愛で取り扱わなかったと考えられる。

このキリストの生涯の物語全体を通して強調されているのは、キリストの愛の行いと神の意志であり、それに燃え尽きたかの感動がディケンズ独特の感情的な語り口で表現されている。またこの物語に関連する種々の奇蹟物語とたとえ語が多く含まれていることである。

奇蹟物語はロベール福音書から「キリの産乳」と「タザロの復活」を含め14か例にも及び、さらに「キリストの度身」の場面を描かれ、イエスが神であることを間もなく示す「イエスの復活」の場面でクライマックスを述べている。たとえ話の例しや論議、賢しき小遣い者に対する愛の行為について語るルカ福音書からのものを引用しているが、最も重要なのは神の愛と神の物語である。ディケンズは「放蕩息子」のたとえ話をかなり長く詳しく扱い、原典には「放蕩息子のたとえ話」のタイトルに、*The Parable of the Prodigal Son* のように二重線を施して、その重要性を強調している。

ディケンズは奇蹟に關しても「愛の行い」<sup>2)</sup>としての側面から捉え、理知的な要素よりも道徳的側面がより前面に出ている。つまり人間性が強調され、聖書としての聖なる儀式の基としての神性が欠落しているという批判も肯定も肯定できる。しかし、ディケンズにとっての宗教観と救いの概念は、聖書的・神権主義的なものではなく、具体的に表されるべきものであるということであり、これはこの作品においても「救い自身会に対する批判において、一貫しており、キリスト教的救いの希望は、この世において経験しうる具体的な表現」である<sup>3)</sup>とディケンズは同じであり、「ディケンズによる福音書」とも評えるこの作品が、示している救いの道は、よみがえりであり、生命であるところのイエス自身である。作品の中でディケンズはイエスのことを、*Our Saviour*

(我が救い主)、あるいは The Son of God と表現し、神の子であり、救い主としてイエス・キリストを指している。ディケンズが病しい者、やめる者、友なき者、子ども、老人、罪に定められた者、これら最も小さい者たちを憐れみ愛しい人々に置き上げた者故に、ディケンズの信仰とキリスト教的世界観によって裏打ちされていることが分かる。

最後に、「おがみの告げ」の作品の最終の言葉から成る Charles Dickens' s prayer (ディケンズの祈り) ① を引用して終わりたい。

Hear what our Lord Jesus Christ taught to His disciples and to us, and what we should remember every day of our lives, to love the Lord our God with all our heart, and with all our mind, and with all our strength; to love our neighbors as ourselves, to do unto other people as we would have them do unto us, and to be charitable and gentle to all.

There is no other commandment, our Lord Jesus Christ said, greater than these.

#### 引用文献

- 1) Charles Dickens: *The Life of Our Lord, The Westminster Press*, p.11, 1924
- 2) ①と同じ pp.22-23
- 3) Gray College: *Dickens, Christianity and The Life of Our Lord, Continuum*, p.88, 2009
- 4) ②と同じ p.87
- 5) ③と同じ pp.2-4
- 6) ④と同じ pp.88-89
- 7) ⑤と同じ p.105
- 8) ⑥と同じ pp.16-17
- 9) 島田桂子「ディケンズ文学の源と流」砂流社、p.23, 2010
- 10) Robert C. Hamra: *The Dickens Christian Reader - A Collection of New Testament Teachings and Biblical references from the Works of Charles*, AMS Press, New York, p.26, 2000

(2016年2月27日投稿)